

書 評

堀内隆行著『異郷のイギリス
——南アフリカのブリティッシュ・
アイデンティティ』
(丸善出版、2018)

並河 葉子



本書は、19世紀初頭から20世紀にいたるまでの南アフリカ史について日本語で本格的に概観できる貴重な良書である。

近年「ブリティッシュ・ワールド」という言葉にふたたび注目が集まっている。本書もその系譜につながる一冊といえるだろう。著者も述べている通り、「ブリティッシュ・ワールド」研究では、イギリス帝国やコモンウェルスの中で異なる民族をも含めて共有されたアイデンティティや紐帯の広がり、多文化性に焦点が当てられることが多い。一方で本書は、異なる歴史的背景を持つ複数のエスニック・グループによって形成された南アフリカに焦点をあて、そこに形成された複雑なアイデンティティを丁寧に叙述している。19世紀から20世紀にかけての世紀転換期から20世紀なかばまでの、南アフリカ連邦という国家の形成期からアパルトヘイトの確立期を対象とし、南アフリカにきた経緯も立場も異なる人びとが、それぞれに紡いだイギリスとの関係性、彼らにとってのブリティッシュ・アイデンティティ、あるいは、南アフリカ連邦形成に関与した人たちが他のイギリス帝国と共有した「ブリタニック・アイデンティティ」(本書77ページ)が、細やかに、かつ鮮やかに描き出される。それを可能にしたのは、著者がこれまでに積み重ねてきた南アフリカの国家形成にかかわる多面的かつ精緻な研究である。以下、まずはごく簡単に本書の内容を紹介することにする。

本書は三部構成となっており、第一部ではミルナーと彼の周辺に集ったキンダーガルテンのメンバーが南アフリカ連邦結成に果たした役割を中心に、イギリス出身者たちが南アフリカにおいてイギリス系入植者とボーア人とが共有できるアイデンティティを模索する姿が描写されている。キン

ダーガルテンは、この後ほとんどがイギリスに帰国してイギリス帝国再編にも大きな足跡を残すことになった。20世紀初頭以降のイギリス帝国再編に伴って形成されていくブリタニック・アイデンティティは、キンダーガルテンの南アフリカ経験を抜きには語るができないことがここで明らかにされている。

第二部では、南アフリカにおける「歴史」の語りと政治の関係について述べられている。アパルトヘイト後の南アフリカにおいてはアフリカーナーを支持層とする国民党と、黒人たちが支持するANCとの対立の中でそれぞれが「歴史」を政治的に利用してきた。しかしながら、南アフリカにおいて「ブリティッシュ・リベラリズム」確立に大きな貢献をしたイギリス系の歴史家の役割については、これまであまり注目されてこなかった。著者は、スコットランド系の血も引くイングランド人歴史家のエリック・ウォーカーをはじめとするイギリス系の歴史家たちに光を当て、彼らによる「南アフリカ史」の語りとその政治的なスタンスについて明らかにしている。彼らの歴史観とその評価の変遷は、政治と歴史観の関係が南アフリカ特有のものではなく、世界中の国にとって古くて新しい問題であることを改めて思い出させてくれる。

第三部では、「カラード」という南アフリカ独特の「人種」がどのような歴史的経緯を経て形成されてきたのかが描写される。カラードのエリートたち自身が歴史を利用しながら、あいまいであった「カラード」というカテゴリを明確な一つのグループへと確立させていくプロセスを、戦間期の重要性に注目しながら述べている。著者によれば、政治的に一定の勢力を持っていた「カラード」は、アパルトヘイトが開始されるとそこに分類される人びとが再編され、グループとしては分割されることになったために政治的なプレゼンスが低下していったという。20世紀の南アフリカ社会は、アパルトヘイトの開始以前から「人種」ごとの分割統治が行われてきた。しかし、「人種」をめぐるこうした事実は、アパルトヘイトの根幹となっていた「人種」の境界が、時の政権の都合によりいかに人為的に操作されてきたものであるかを説得的に示している。ところで、南アフリカの政治や社会を考えるうえで不可欠な「人種」概念は、決して南アフリカに特有のものではないことも忘れてはならない。19世紀後半から20世紀にかけて

は世界中で「人種」が政治に利用された。帝国主義の拡大を正当化する一つの手段として「科学的人種主義」がヨーロッパ列強によって使われ、日本もそうした流れと無縁ではなかったのだから。

通読すると、現代社会の諸問題がいかにして歴史的に作り出されてきたのかが、南アフリカというプリズムを通して鮮やかに浮かび上がってくる。決して大部ではない本書でこれだけの内容を手際よく語る著者の手腕は敬服に値する。

ところで、「ブリティッシュ・アイデンティティ」と並んで本書を貫くキーワードとなっているのが、その基層を成す「ブリティッシュ・リベラリズム」である。この言葉は、南アフリカのみならず、イギリス帝国のアイデンティティを語るときに必ず枕詞のように付されるが、指す内容が幅広く、時代によって、あるいは使う人によってそれが意味する内容が少しずつ異なる。本書の第二部には、ウォーカーにとってのリベラリズムに関連して、「南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティをすべての人種に公正なリベラリズムと性格規定し」(本書103頁)との記述がある。「すべての人種に公正であること」は、当時は、非白人に対するパターンリズムでもあった。実際、第二部で取り上げられたウォーカーの歴史観は、西洋中心主義的であるとして南アフリカでも1970年代以降、批判が強まっていることを本書も指摘している。こうした、「ブリティッシュ・リベラリズム」あるいはパターンリズムの実相については、本書ではあまり取り上げられていないミッションや宣教師の活動と合わせて考えるとよりクリアになるだろう。

19世紀半ば以降、南アフリカにはイギリスを母体とするキリスト教伝道団体が多くのミッションを派遣していた。現場で活動する宣教師たちもイギリスが掲げる「人道主義」や「ブリティッシュ・リベラリズム」の思想を共有していた。19世紀半ばまではワーキング・クラスの出身者が多かった現場の宣教師にとって、植民地経験とは、そこでイギリス本国出身のエスタブリッシュメントと「リベラリズム」の理念の共有を確認し、自身の社会的な階梯を上昇させるものであった。本書が扱う時期になると、宣教師は新しい職業としてイギリス社会でも広く認知されるようになっており、イギリス本国で大学進学者が増加するにつれ、卒業後の進路のひとつとして

選択されることも珍しくはなくなってきていた。

本書で取り上げられている人物の多くは、オックスフォード出身のイングランド人である。一方、多数の宣教師を送り出したのはむしろケンブリッジであり、また、スコットランド人(大学で専門教育を受けた医師が多く含まれる)も多かった。南アフリカ連邦形成の際に政権の核として動いたオックスフォード出身のイングランド人たちとは少し離れたところにいるとはいえ、スコットランド人やケンブリッジ出身の宣教師たちも、南アフリカ連邦とブリティッシュ・ワールドの形成に大きくかかわったはずである。

イギリス人たちが南アフリカをはじめ植民地で唱導した「ブリティッシュ・リベラリズム」は、非ヨーロッパ人に対するとき、「ブリティッシュ・パターナリズム」へと形を変えた。実際、宣教師たちはリベラリズムの理念を「文明化の使命」というパターナリズムに読み替えて、アフリカ人の「イギリス化」を推進する役割を担っていた。また、「すべての人種に公正である」はずのリベラリズムが結局のところ「イギリス化」に他ならなかったことは、アフリカーナーのナショナリズムとの対立を招くことにもなった。しかしながら、アパルトヘイトの時代に向かって「白人」というエスニック・グループに収斂していくプロセスにおいて、アフリカーナーたちとイギリス系の人びととの間を心情的につなぐうえで、スコットランド人宣教師の果たした役割も大きかっただろう。スコットランド教会はオランダ改革派教会と同じく長老主義をとっており、そこを母体とする伝道団体や宣教師のネットワークは、南アフリカのアフリカーナーたちと様々な接点を持っていたと考えられるからである。宣教師は地域や組織を移動しながら活動し、伝道団体は国家の枠を超えたネットワークを持っている。こうした人びとや組織に注目すると、南アフリカのみならず「ブリティッシュ・ワールド」における人びとのアイデンティティ形成の新しい側面が見えるだろう。

20世紀後半の南アフリカについては、アパルトヘイトをはじめとする人種問題にもっぱら世間の関心が向けられ、ある意味で特殊な国家というイメージがついて回ることになった。しかしながら、南アフリカは、ある時期まではイギリス帝国政策立案の要であった。本書は、イギリス帝国で

共有されたブリティッシュ・リベラリズムの理想や政策の方向性と南アフリカ連邦形成の中核にいた人達のそれとは、少なくとも20世紀前半においてそれほど大きくずれてはいなかったことを明らかにしてくれている。「ブリティッシュ・ワールド」の世界観には、帝国政策立案者たちの南アフリカ経験が色濃く反映されていたのだから。

南アフリカは、いつ、そしてなぜ旧イギリス帝国の異端児になったのだろう。南アフリカ特有の人種構成が大きな影響を与えていたことは間違いない。とはいえ、かつてイギリス帝国に属した国々が表向きだけでも人道主義やリベラリズムを追求していく中で、南アフリカがそうした理想主義を捨ててアパルトヘイトの道を歩むことになるきっかけになった出来事や状況は、実は他の国にもいつ訪れてもおかしくはないだろう。世界中で排他主義が台頭している今だからこそ、本書に書かれた歴史の意味が誰にとっても深い意味を持つ。歴史と今を見事に架橋して見せてくれた著者に感謝する。

——神戸市外国語大学教授